

第2節 共和政以降 (奴隷解放から現在まで)

奴隷制廃止の翌年 (1889 年)、共和政に移行したブラジルは政教を分離した。植民地期以来続いてきた国家によるカトリック教会への庇護が終わったのである。このことは、同国での宗教の多元状況が当然視されるようになったことを意味する。コーヒープランテーションでは奴隷に代わる労働者として大量の移民が迎えらるようになった (表 1)。日本からの移民は、このような歴史的文脈において 1908 年に始まった。いうまでもなく人の移動は文化の移動を意味する。さまざまな移住者と共に宗教も新天地に移植されたのである。例えばドイツ人は彼らの生活に適した気候に近いブラジル南部を移住地として選び、町を開いてプロテスタント教会を建設した。それゆえサンタカタリーナ州やリオグランデドスール州、そしてパラナ州にはドイツ本国の家並みを想起させる町がみられる。

(表 1) 国別移住者人口 (単位 千人)

期間\国名	ポルトガル	イタリア	スペイン	日本	ドイツ	合計
1851/1885	237	128	17	-	59	441
1886/1900	278	911	187	-	23	1398
1901/1915	462	323	258	14	39	1096
1916/1930	365	128	118	85	81	777
1931/1945	105	19	10	88	25	247
1946/1960	285	110	104	42	23	564
合計	1732	1619	694	229	250	4523

出典 : (Ribeiro 1997:242)

では、日本の移住者はどうだろうか。サントス港で下船した人々は、鉄道沿線に移住地が点在するサンパウロ州奥地からパラナ州やマットグロッソ州に向かった。戦前の移住者は錦の旗を掲げて祖国に帰ることだけを念願する出稼ぎだった。それゆえ彼らは「宗教」を日本においてきた (前山 1996 : 45)。というも、日本人の信仰活動として想起されるのは先祖祭祀に他ならなかったわけであり、イエの墓が日本にある限り、ブラジルは宗教を実践する場所ではなかったからである。しかし、彼らの帰国への願いと裏腹に、ブラジルで待ちうけていたものは過酷な試練の毎日だった。コーヒープランテーションで働く黒人奴隷の代替として移住した彼らのなかには、巨万の富を得て日本に帰ることは夢でしかないという者が多かった。第二次世界大戦での日本敗戦という事態に遭遇し、やがてブラジルを第二の祖国として選ばざるをえない現実を悟るに至る。かくして、彼らは定住する意思を定め、ブラジルの「ニホンジンの祖先」になることを決断したのである。このような理由から、日本人や日系人によるブラジルでの宗教活動が本格化するのはいくかの例外を除いて戦後になってからのことである。

さて、日系人がブラジル社会に多大な貢献をしていることは衆目の一致するところで、一例として農業分野における活動が挙げられる。南東部では日系人が作る農業産品のおかげで野菜の種類は豊富であり、白菜、大根などの葉野菜・根菜類はもちろんのこと、近年ではエノキやシメジなどのキノコ類も容易に入手できるようになった。彼らが生んだ南米最大の農業協同組合 (コチア産業組合、1927 年設立—1994 年解散) は、ニホンジンの団結力・組織力をアピールした。また、古いデータだ

が、一流大学として定評があるサンパウロ大学に合格する日系人は 1967 年の段階で全体の 12% を占め (齊藤 1978: 206)、現在もニホンジンは優秀だとみなされている。実に人口が全国比で僅か 1% にも満たない日系人の活躍は、さまざまなところに及ぶ。こうしたことから、日系人には「ジャポネス・ガラチード (信頼できる日本人)」というイメージが付与されるようになった。このようなプラスのイメージは非日系ブラジル人に日本の新宗教をアピールする要因の一つになっている。

第3節 サラダボール社会の宗教

以上述べてきたように、ブラジルは、先住民、ポルトガル人、アフリカ人の 3 人種に加えて、ヨーロッパや日本からの移住者によっても形成され、文化を育んできた。その宗教風土はカトリシズムが表向きを装っているとはいえ、内側に様々な信仰形態を擁している。たとえば、1930 年代に南東部で生まれたアフロブラジリアン宗教ウンバンダの儀礼は基本的にキリストの名において始められるが、先住民の諸霊、アフリカの神々、キリスト教の諸聖人が習合し、さらにフランスから伝えられた心靈主義カルデシズムの教えと実践が混淆している。こうしたブラジルの社会・文化・宗教のありようは、坩堝というよりもサラダボールのようである。坩堝では様々な要素が元来の姿を留めないまでにすりつぶされてしまうが、サラダボールではそれらは切り刻まれても元来の持ち味を残しているからである。前号で紹介したダルシー・ヒベイロは、ブラジルを単数形のオ・ブラジル (O Brasil) ではなく、複数形のオス・ブラジス (Os Brasís) と表現した (Ribeiro 1997:269)。ブラジル性 (brasilidade)⁽¹⁾ という近代化の統合原理のもとで、多様な人種や文化、宗教が混在するようになった社会、それがブラジルである。

ブラジルの宗教風土全般についてももう少し付言しておこう。ブラジルではカトリック教会というドミナントな宗教を基盤として信教の自由が保証されている。そして、ひとはカトリックだと言いつつも名目信者であることが多い。近年活動が活発になったプロテスタント諸教会は例外として、人びとはカトリックを否定せず同時にアフロブラジリアン宗教やフランス系心靈主義のカルデシズムに足を運ぶ。日本の新宗教もまた、それらと同様にブラジルの宗教風土の中に溶け込んでいる。一人の人間が、カトリック信者だといいいながらカルデシズムにも行く。あるいは日本の新宗教にも行ってみたりする。日本の新宗教はそのような選択肢の一つなのである。とはいえ、各自の信仰が深まれば、カトリック以外の信者であることを自認するようになることも事実である。ひとが、いわばいくつかの宗教的な顔を持つことが許される空間。それがブラジルの宗教風土なのである。

[註]

(1) 1930 年代に始まったブラジルの近代化では、国民の統合原理としてブラジル性 (brasilidade) が称揚された。

【参考文献】

Ribeiro, Darcy. *O povo brasileiro: a formação e o sentido do Brasil*, Companhia das Letras, 1997

前山隆『エスニシティとブラジル日系人』御茶の水書房、1996 年。

齊藤広志『外国人になった日本人』サイマル出版会、1978 年。